

現代フランス哲学における「歴史論」

「歴史記述」の存在論的・倫理的意義をめぐって

オーガナイザー・提題者: 山野弘樹(東京大学)

提題者: 石井雅巳(慶應義塾大学)、福井有人(東京大学)

アメリカの歴史家・文芸批評家であるヘイデン・ホワイトが『メタヒストリー——十九世紀ヨーロッパにおける歴史的想像力』(1973)を公刊して以降、歴史学・歴史理論の領域では、主に「言語論的転回」ないし「歴史の物語論」と総称される論争が盛んに議論されてきた。例えば日本においては、野家啓一、高橋哲哉、テッサ・モーリス＝スズキなどに代表される論者たちが論争を主導してきた。しかし、彼らが論争を展開してきた 1990～2000 年代に比べると、こうした議論が、今日において精力的に展開されているとは言い難い。だが、「歴史」をめぐる問題は、依然として哲学的に議論されるべき深刻な問題を含んでいる。論争はまだ終わっていない。むしろ、前世紀における戦争の「記憶」が次々に失われている今日においてこそ、私たちは歴史を物語ることの意義について、改めて考えなおす必要がある。そうした意味で「歴史」をめぐる問題とは、20 世紀の戦争の記憶を語り継ぐという義務を有した今世紀における最大の問題の一つである。こうした問題関心のもと、本ワークショップは、歴史記述が有する存在論的および倫理的な意義を、現代フランス哲学の観点から再検討することを目的とする。

以下では、「歴史」をめぐる問題を三点に大別することを通して、本ワークショップ全体の核となる論点を提示することにした。一点目は、歴史記述とフィクションの関係をめぐら問題である。すでに〈歴史記述とフィクションの区別不可能性〉とも言うべき論点は、上述した論争の中で指摘されてきた。実際、私たちは歴史記述と、それが対象とする実際の過去との間の対応関係を俯瞰的に比較する視座を持たない。さらに、歴史記述がフィクションを創造する想像力を含む形で成立していることもまた事実である。こうした状況において、私たちは両者の錯綜した関係をいかにして分析することができるのだろうか。二点目は、歴史記述とそれを生産する場の関係をめぐら問題である。歴史記述は、記憶や証言の信頼性を問い、それらを史料としてまとめ、歴史的出来事に関する説明／理解の方式を模索しつつ、それらをエクリチュールに仕上げていくというプロセスを踏まえる。しかし、そのようにして実践される歴史記述自体が、ある歴史研究者の視点や、その研究者が位置する社会構造に拘束を受けていることもまた事実である。こうした状況において、いかなる正当性が歴史記述に担保されるのであろうか。三点目は、歴史記述と他者、とりわけ死者の関係をめぐら問題である。(出来事の意味での)「歴史」が人間の行為の集積によって生み出されている以上、そのような事象を対象とする歴史記述の営みが、過去の死者たちを叙述に含まないということはある得ない。しかしそのとき、歴史記述は過去の死者たちに対して、何を行っているのだろうか。それは弔いの作業か、それとも語り／騙りの暴力か。こうした歴史記述における「正義」の問いに私たちは取り組む必要があるだろう。これらの問題を念頭に置きつつ、それぞれ異なる現代フランスの哲学者を専門とする三人の提題者が、提題および議論を行う予定である。

1. 山野弘樹「ポール・リクールの歴史記述論——負債、痕跡、そしてフィクション」

「自己の解釈学」の思想で知られる哲学者ポール・リクール(1913-2005)は、主著『時間と物語』(1983-85)および『記憶、歴史、忘却』(2000)において、体系的な歴史記述論を展開した。まず指摘しなければならないのは、歴史記述に関するリクールの叙述が、常に両義的な(揺らぎ)を示している、ということである。というのは、リクールは歴史記述をフィクションから峻別する態度を示す一方で、フィクションと歴史記述を相互に含み合わせるような議論をも提示しているからである。こうしたリクールの論述は、〈歴史を記述すること〉という事柄そのものが示す緊張関係に、リクールが真摯に寄り添い続けた結果であると言える。だからこそ、晦渋なリクールの議論を解きほぐしつつ、その今日的な意義を明るみにもたらすという作業は、決して無益な試みではないであろう。本提題は、『時間と物語』および『記憶、歴史、忘却』に通底するリクールの歴史記述論の特質を、「負債」・「痕跡」・「フィクション」という三つの観点から析出することを目的とするものである。そして本提題を通して、本ワークショップ全体に関わる三つの論点に対して応答することを試みたい。

2. 石井雅巳「レヴィナスにおける反-歴史論と断絶における倫理」

エマニュエル・レヴィナス(1906-1995)は、とりわけ『全体性と無限』(1961)において、歴史記述への苛烈な批判を繰り返して述べている。レヴィナスにとって「歴史記述とは勝者、言い換えれば生き延びた者たちが達成する搾取に基づくもの」であり、個々の他者の特殊性を無視し、自らの都合のよい物語へと回収する全体性の暴力であるとさえ言える。もちろん、レヴィナスは歴史一般を十把一絡げに拒絶していたわけではなく、彼にとって批判されるべきは、しばしばヘーゲルに帰せられる目的論的な歴史観である。そのような全体性を形づくる目的論的な歴史に抗してレヴィナスが要請するのは、断絶を含んだ非連続的な時間性である。とはいえ、そのような特異な時間性において、果たして他者や死者を倫理的な仕方語り継ぐことは可能なのだろうか。本提題では、歴史記述が不可避免的に抱えてしまう暴力性を告発しつつ、生き延びてしまった者による弔いの倫理を模索したレヴィナスの姿に焦点を当て、改めて歴史と倫理を問い直すこととしたい。

3. 福井有人「歴史家はどこから語るか——ミシェル・ド・セルトーと歴史記述の問い」

歴史とは虚構の語りなのだろうか。この点について、ミシェル・ド・セルトー(1925-1986)の立場は捉え難い。『歴史のエクリチュール』(1975)において、歴史一般は(1)特定研究分野による実践、(2)その結果としての言説、そして(3)両者の関係として捉えられている。歴史というものをこのように規定するセルトーにとり、歴史記述の営みは抜き差しならぬ問題であった。というのも歴史記述は、書くこと(この実践じたいが歴史的な刻印を押されたものであることも強調される)を通して不在者と関係を結ぶことのできる特異な実践であると考えられるからである。歴史の語り死者に死者のための場、「墓」を提供するのであり、それによって弔いが可能になるとされる。だが、その一方でセルトーは、そうした実践じたいがある種の否認——おのれがどこから語っているのか、いかにして「現実的なもの」と関係を結んでいるのか、見ないふりをするということ——によって成り立っている、とも考えている。このような両義的な態度をめぐって、セルトーの歴史理論を今日的な展望に置きながら検討したい。